2021/7/21 海上保安

右舷灯

さんふらわあに乗る

大型フェリーの代名詞にもなった「さんふらわあ」。1970年代前半に華々しく登場し、日本の長距離フェリーをクルーズフェリーに仕立てた立役者だが、オイルショックの影響で名付親の手を離れ、運航会社は次々と変わった。しかし、その後継船は、北の北海道航路から、南の鹿児島航路まで活躍している。

最初の5隻の姉妹船では、「さんふらわあ」の後に「2、4、5、8、11」と番号を付した船名だったが、今では「さつま」や「ふらの」など、就航航路周辺の地名をつけた船が多い。瀬戸内海航路の雄であった「関西汽船」と「ダイヤモンドフェリー」の2社が統合されて、その社名が「フェリーさんふらわあ」となった時には、会社名にまで「さんふらわあ」が使われたのだから大いに驚いた。

去る1月15日、その1隻である「さんふらわあきりしま」に大阪南港から乗った。2年前に、JMUで建造された2重反転プロペラ推進の省エネ新鋭船だ。

実は、40数年前、「さんふらわあ11」の船上で結婚式を挙げたのが1月15日だったので、それを記念しての乗船だった。当時、船は鹿児島まで行っており、ちょうど志布志沖を航行中にブリッジで式を挙げさせてもらった。運航は日本高速フェリーで、その後、運航会社はブルーハイウェイライン、ブルーハイウェイライン西日本、ダイヤモンドフェリー、フェリーさんふらわあと変わったが、船名に冠する「さんふらわあ」の6文字は脈々と継承された。そして、「さんふらわあ～さんふらわあ～太陽に守られて…」という「さんふらわあの唄」も健在で、出入港時に船内に流されていた。

夕刻に大阪南港を出港した「さんふらわあきりしま」は、一路、大阪湾を南下して、2時間後には友ケ島水道を抜けて太平洋に出る。その間、展望浴場で汗を流し、レストランで食事を楽しむ。そしてゆっくり眠れば、翌朝には都井岬が見えて、いよいよ志布志港への入港だ。愛車で九州に上陸した後、鹿児島港でたくさんの船を見て、温泉に浸かり、郷土料理も楽しんで、再び、船で大阪に戻った。気軽なフェリーの旅も素敵だった。

（池田良穂）